

『銀河に浮かぶ、後半アディショナルタイム』

✽✽

夜空に散りばめられた中で最も美しい星屑に手を伸ばす。

驚掴みにして、足元に置いて、呼吸を整えて、審判の笛を待った。

ピーッ！

軽く助走をして、左足で蹴り上げた。

狙い通りの、綺麗な放物線が描かれてゴールネットに吸い込まれていく。

後半アディショナルタイム。

値千金の逆転ゴールが生みだされた瞬間、スタジアムが湧いた。

ワァーッ！

ワァーッ！

ワァーッ！

我を忘れて、

喜びを分かち合って、

ユニフォームを脱いで投げ捨てて、

イエローカードを貰っちゃったりして、

それでも興奮が冷めないから、

空に向かって思い切り拳を突き上げた。

「ちょっと待ってえ」

見上げると、ピンク色のピーマンが浮かんでいて、

そこから声が聞こえているようだった。

「返して貰ってもいいかなあ？」

記憶が芽生えた頃から今の今までつぶいていた価値観が、見事に崩れ去った。

「あのね、君が取ったの一番星なのよ。しかも驚掴みにしてたで？　こちら側的にも、さ

すがに一番星はマズいんちゃうかなあ、と思った矢先に鷲掴みやろ？ そこらへんをもう少し丁寧に考えてくれていたらこんな大事にはせえへんかったと思うねん」

スタジアムの観客も、
ベンチの監督も、
コーチもスタッフも審判も、
線審もチームメイトも対戦相手も、
石像にでもなってしまったかのように固まっていた。

「どないしてくれますのん？」

僕は、焦ることなく、
最も使い古されていると感じたサッカーボールを、
時間を掛けて探し回ってから、ピンク色のピーマンに手渡した。

「そうそうそう。こちらの世界の星屑と、そちらの世界のサッカーボール。試合が終わればノーサイド。交換しましょう、そうしましょう！ ……って、真夏のポップコーンじゃないんやから！」

僕は、表情一つ変えることなく無言を貫いた。
十五秒くらい経って、ピンク色のピーマンから声が届いた。

「……言うとかけど、こちら側とそちら側の常識が同じやと思わんといてな？」

照れくさそうな声色こわいろを感じて、
幼少期の恥ずかしかった思い出を連想している。

「え？」

スタジアムの観客も、
ベンチの監督も、
コーチもスタッフも審判も、
線審もチームメイトも対戦相手も、
まるで世界が移り変わってしまったかのように、
綺麗さっぱり消滅していた。

「勘違いしてたら困るんやけど、消滅したのはこちら側やからね？　なんであちら側が消えたと思てんのよ」

見渡す限り、果てしなかった。

これが、銀河とでもいうのだろうか？

星空の輝きに圧倒されて、

自分と、ピンク色のピーマンだけしか存在していない真実を掴み取った頃、

不安感を抱くよりも先に、うつくしい星屑を順々に蹴り上げたい衝動に襲われていた。流れる星屑を目の当たりにして、

頭で合わせてヘディングシュートを決めるイメージが三つも四つも明確に湧いてくる。

無限大の想像力に包まれながらも、

ふと、

使い古されたサッカーボールが一つ、

浮かんでいることに気が付いて、

冷静な心持ちが宿って素朴な疑問を投げかける。

「サッカーボールが浮いているは、どういう構造なんですか？」

「ああ、これ？　君がさっき驚掴みにした一番星の代わり。使い古してあるけど、せっかく君が時間を掛けて探してくれたから飾っておいたんよ。名づけるならば、一番サッカーボールって感じかな？」

「やっぱり好きなスポーツ番組はサッカーですか？」

「サッカーはする方が好きかな。見るのはバスケットボール。教えるのは野球。癒されるのはフィギュアスケート。感情移入しやすいのは水泳かなあ？　昔、水泳やってたことあるねん。そういう風にみえる？」

僕は、『ピンク色のピーマンに目があればこの辺りだろう』と思う場所に焦点を当てながら伝えていた。

「むちゃくちゃ見えます」

「そうかいな？　スポーツやってたようには見えへんってよく言われるから地味に嬉しいかも。吹奏楽部とか、書道部とか、見た目で判断されることが多いねん……そうや、この際やから言うとかくけどな……」

一番星の代わりに浮かぶ、
一番サッカーボールが発光し始めている。

「……で、そのときに閃いたわけ。今までなんとなく感覚でやっていたことが一直線に繋がった感じっていうのかな？ だから水泳を始めたってわけやねん。正直、ここまで話したん君が初めてかも。なんか物凄く小恥ずかしいけど、ここからが大事なところやから耳を澄まして聞いてや……」

スタジアムで最も使い古されたサッカーボールを選んだのに、
環境が変われば、こんなにも印象が変わるのか、
なんて思い込まされている自分自身の感覚に関心が湧いて、
どんどん、どんどん、内なる心に耳を澄ましていく。

「……って、遠足前の小学生じゃないんやから！」

僕は、一番サッカーボールの急激な変化に感動していた。
おもわず、想いが溢れている。

「……なんでそんなに輝けるねん」

「赤ん坊と同じくらい無垢で純粹やからやで」

「スタジアムに転がったときはあんなに……」

「意識と環境の問題やで」

「僕の知らないサッカーボールがここにおる」

「世界はどこまでも広いんやで」

「……」

「私はアンタのヒロインになりたいんやで」

「……」

「……って、ちゃいますやん。もっと不思議な事、山ほどありますやん！」

ふと、

頭の中に、

審判の笛の音が鳴り響いていた。

ピーーツ。

遙か昔の出来事のように感じた僕の肉体には、

鷺掴みにした一番星の感触が残されている。

「僕が鷺掴みにした星屑はどこに行ったんですか？」

「あちら側の世界におるで」

どうして僕は、最も美しいと感じた星屑に手を伸ばしたのだろうか？

「君が、しれっと、こちら側に入り込んできて一番星を鷺掴みにして、そちら側の世界に持っていったってフリーキックを蹴ったからややこしいことになってるんやんか」

どうしてだろう、

ピンク色のピーマンの声が、やけに胸に刺さった。

「あちら側の僕は今、何をしているんですか？」

喋りながらも、

幼少期、ピーマンが食べられなくて、

泣きわめいていた頃の記憶が蘇ってきて、

当時の感情がそのまま肉体を駆け巡っていた。

「一生懸命努力して立派なサッカー選手になって国の代表として試合に出ているのに、『純粹に楽しむことを見失ってはる』をしてはるで。周りからは華やかそうに見えるんやろけど、当の本人がどない思っているんかは見ての通りや」

あの頃の僕は、

苦手なピーマンが食べられただけで、

滅茶苦茶嬉しくて、

誰かに見て欲しくて、

自慢したくて、

あるがままの言葉を口にしていた。

「純粹に楽しむってどういうことですか？」

銀河に浮かぶ、

ピンク色のピーマン。

銀河に浮かぶ、
一番サッカーボール。

銀河に浮かぶ、
後半アディショナルタイム。

「ていうかさ、そちら側のフォワード誰やった？」

反射的に、『大林のおおぼやしおおぼやしのワントップですよ』と、返していた。

我がチームの頼れるエースストライカー。世界でも有数のクラブチームに所属してトッブレベルの活躍を披露している。ここ三年間は無双状態に入り、今大会でも得点王に輝くだろう。常に、『自分にとっては当たり前でこれはまだまだ通過点に過ぎない』と、自らを奮い立たせる彼の姿に何度も救われている。

「本心はそんなこと思ってたんや」

と、ピンク色のピーマンが言った。

「アンタら犬猿の仲とか言われてるみたいやなあ。どっちが犬でどっちが猿かはよう分からへんけど、お互いに馬が合わへんいうて周りに気を遣わせてるらしいやん。家が近所の幼馴染で昔ピーマン食べられるか食べられへんかで喧嘩になって、それからしょうもないことでずーっと喧嘩してるらしいやん。小、中、高、大学も一緒に同じチームでサッカーして同じタイミングで代表に選ばれてんのに未だに言い合いしかしてへんらしいやん」

当時の記憶が浮かんできて、

オオバヤシの生意気な態度を思い出してしまった。

「ニンジン食べられへんくせにピーマン食べられるって粹がってるのが気に食わない」

頭の中で、オオバヤシの声が鳴った。

『ピーマン食べられへんくせにニンジン食べられるって粹がってるのが気に食わない』

ムカつくのに、懐かしくて、愛おしかった。

これ見よがしに、ピンク色のピーマンが語り掛けてくる。

「だからアンタらここまで這い上がって来られたんかあ。オオバヤシに感謝やな」

すっかり見失っていた想いを今、確かに味わっている。
でもどうしても認めたくなくて、素直になるのを怖がった。

「アイツだけには死んでも感謝しませんよ」

輝く一番サッカーボールを見つめる僕の頭の中には、
物心ついた頃から芽生え始めた数々の記憶が、何千何万と散りばめられていた。

「高校時代大怪我したとき、隣で支えてくれたん誰やった？」

そうや、大怪我したやん。

「君の爺ちゃんが亡くなったとき、一緒になって泣いてくれたん誰やった？」

そうや、もう爺ちゃんおらへんやん。

「君が給食で残したピーマン食べてくれたん誰やった？」

そうや、ピーマン食べられへんかったやん。

僕はピンク色のピーマンを眺めながら思った。

大切なことって、なんですぐに忘れてしまうんやろうって。

「いつからピーマン食べられるようになったんやろね？」

ピンク色のピーマンの声が、銀河全体に轟いた。

「はい、あーん」

赤ん坊みたいに口を大きく開けている。

導かれるように、ピンク色のピーマンが舌の上に転がり込んだ。

よく噛んで、よく味わって、

オオバヤシの優しさと共に、喉元を通して、胃袋に納まっていく。

「使い古した記憶を、磨いてあげてや」

胃袋の奥底から、か細い声が聞こえて、消化されていく。

「おい！ 頼むで！」

気が付いたとき、

オオバヤシが、僕の背中を叩いていた。

スタジアムの観客も、

ベンチの監督も、

コーチもスタッフも審判も、

線審もチームメイトも対戦相手も、

何事もなかったかのように、元通りに戻っている。

「なんやボーっとして、別世界にでも行ってたんか？」

オオバヤシの声に反射的に答えてしまった。

「うるさい、ボケ。オマエは黙っとけ」

「ここで決めたら世界一やぞ。ホンマに決められるんか？ オマエが外しても俺が決めて

ヒーローになることしか考えてへんけどな」

「いちいちオマエに言われたくないねん」

「俺がおらへんと何もできひんくせに調子乗んなよ」

「ニンジン食べてあげたん誰やった？」

「いつの話してんねん。オマエもピーマン食われへんかったやろ。アホ、決めるよ」

背中を叩いて、ゴール付近に離れていく。

「おい、オオバヤシ！」

ピンク色のピーマンは、

味わい深かった。

「なんや、蹴らせてくれるんか？」

夜空を見上げる。光り輝いている。

最もうつくしい星屑を驚掴みにして蹴り上げた衝動に襲われたが、ぐっと堪えて、オオバヤシの目を見て、素直な言葉を口にする。

「ピンク色のピーマン滅茶苦茶うまかったで」

ピーーッ！

軽く助走をして、
使い古されたサッカーボールを、左足で蹴り上げた。